【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6111

（様式１）

業務実績書

研№49

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備（(1)－①）

【事業概要】

文化財関係の情報を収集して積極的に発信するため、ネットワークのセキュリティの強化及び高速化等に対応した情報基盤の整備・充実を図り、システム面から文化財に関する専門的アーカイブの拡充、データベースの充実を支援する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長　二神葉子

【スタッフ】

田中淳（企画情報部長），山梨絵美子（副部長），津田徹英（文化形成研究室長），塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長），綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長），小林公治（広領域研究室長），小林達朗（主任研究員），皿井舞（主任研究員），城野誠治（専門職員），中村明子（アソシエイトフェロー），井上さやか（アソシエイトフェロー），橘川英規（アソシエイトフェロー），鳥光美佳子（アソシエイトフェロー）

広報委員（LAN）：

川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）　各部門 LAN 担当：崎部剛（前研究支援推進部総務係長），高砂健介（研究支援推進部管理室長），綿田稔（企画情報部文化財アーカイブズ研究室長），飯島満（無形文化遺産部音声・映像記録研究室長），森井順之（保存修復科学センター主任研究員），加藤雅人（文化遺産国際協力センター主任研究員）

【主な成果】

保守期限切れを迎えるネットワーク機器の更新を実施するとともに、メールシステムとして Google Apps for Business を導入し、利便性を向上させた。

【年度実績概要】

ネットワーク機器の更新

・平成 24 年度にハードウェア保守の期限が切れるネットワーク機器を更新した。具体的には、所外への情報公開用 DNS/Web サーバ、内部 DNS サーバ及び DHCP サーバである。DHCP サーバについては 2013 年にハードウェア保守期限が切れることから当初は次年度の更新を予定していたが、節約により本年度末に更新することができた。

・メールサーバのハードウェア保守期限切れのタイミングで、Google Apps for Business を導入し、Gmail に移行した。このことで、メールに関する所内での保守が不要となったうえ、稼働率はほぼ 100%となった。さらに、出張先等での連絡が円滑に実施できるようになり、利便性も向上した。

・職員が使用しているコンピュータ用のウィルス駆除ソフトウェアについて、Kaspersky Anti-Virus 及び ESET NOD32 の 2 種類のソフトウェアのライセンスを、それぞれ所内で使用されているコンピュータ台数の半数分ずつ購入し、全てのコンピュータが一斉に同一の不具合を引き起こさないよう工夫した。

ネットワーク機器の新設

・近年の大災害の発生にかんがみ、遠隔地でのデータのバックアップの必要性があると考えたことから、奈良文化財研究所との間で VPN による接続を行い、それぞれにバックアップサーバを設置して定期的にバックアップを実施するためのシステムを整備した。

・ノート PC やタブレット端末等でのネットワーク利用のため、一括での管理が可能なセキュリティレベルの高い無線 LAN を導入した。

【実績値】

サーバ更新　3 件（うち、所外 DNS/Web サーバ　1 件、内部 DNS サーバ　1 件、DHCP サーバ　1 件）

サーバ新規設置　1 件（バックアップサーバ）

システム新規導入　2 件（うち、ネットワーク/サーバ危機管理システム　1 件、クラウドメールシステム（Google Apps for Business）　1 件、所内無線 LAN　1 件）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6111

自己点検評価調書

研№49

１．定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性			
判定	A	A	A			

判定理由
適時性：適切な時期に機器及びシステムを更新することができた。
効率性：メールサーバを Google Apps for Business にすることで、保守費用を大きく削減した。
継続性：継続的にネットワークシステムを運用することができた。

２．定量的評価

観点	サーバ更新	サーバ 新規設置	システム 新規導入			
判定	A	A	A			

判定理由
サーバ更新：Google Apps の導入や入札による節約の結果、当初の予定よりも多く実施することができた。
サーバ新規設置：当初の予定通り実施することができた。
システム新規導入：ネットワーク/サーバ危機管理システム及び無線 LAN の導入は年度計画には予定がなかったが、節約の結果実施できた。また、従来のシステムより安定した利便性の高い Google Apps for Business を導入できた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	情報システムの整備については、ネットワーク環境の更新に伴い、セキュリティの強化及び高速化が図られた結果、適時性、効率性、継続性が向上したと判断した。次年度以降も、安定運用と効率化、利便性の向上を図る。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	情報システムの整備については、セキュリティの強化及び接続速度の高速化を図るに当たり、利便性を保ったうえでより効率的な運用ができるよう、ネットワーク環境の段階的な更新を進めた。次年度以降についても保守期限切れを迎えるネットワーク関係の機器の更新を実施するが、ユーザの意見を取り入れて費用対効果の高い機器の導入とその安定的な運用に努めるとともに、保守内容の見直しなどによりさらなる費用の削減を図る。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6112

（様式１）

業務実績書

研№50

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	無形文化財に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化（(1)－①）

【事業概要】

無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。第１期中期計画（平成 17 年度終了）の事業案策定後の購入・寄贈にかかるアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸

【スタッフ】

高桑いづみ（無形文化遺産部無形文化財研究室長）、飯島満（音声・映像記録研究室長）、今石みぎわ（研究員）、星野厚子（研究補佐員）、綿貫潤（研究補佐員）、佐野真規（研究補佐員）

【主な成果】

昨年度までに受入れ手続きが完了した資料の内、経年変化に伴う音質劣化が懸念されるオープンテープのデジタル化を昨年度に引き続き実施した。カセットテープに関しても、将来のデジタル化を視野に、収録内容の確認を含めた整理を行った。

【年度実績概要】

無形文化遺産部が推進した音声記録のデジタル化は、前年度に引き続き、1960 年代に放送された邦楽関連のテープ録音を中心に行った。この当時の放送録音は、放送局にも記録が保存されていないものが多いことから、その資料的な価値が近年再認識されつつあるもので、本年度はＣＤで 149 枚を作成した。また、媒体変換を完了した音声資料の内容確認を行い、インデックス付与済みＣＤを 25 枚作成した。カセットテープに関しては、旧芸能部民俗芸能研究室所蔵テープ、及び寺事の現地録音を中心に内容確認を行った。画像資料の媒体変換に関しては、マイクロフィルムのデジタル化に着手し、ＤＶＤ32 枚を作成した。

この他、無形文化遺産関連の映像資料 240 枚（作成ＤＶＤ236 枚・作成ＢＤ4 枚）を登録した。

【実績値】

ＣＤ作成　149 枚

ＣＤ作成（インデックス付与済み）　25 枚

ＤＶＤ作成（画像資料）　32 枚

ＤＶＤ・ＢＤ作成（映像資料）　240 枚（DVD236 枚・BD4 枚）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6112

自己点検評価調書

研№50

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性	発展性		
判定	A	A	A	A		

判定理由
適時性：アナログ資料の経年劣化が深刻化する前に媒体変換を行うことができた。
独創性：他の公的機関では所蔵されていない資料の恒久的な利用に向け、処理を行っている。
継続性：アナログ資料の継続的な媒体変換とともに、資料整理も着実に進めている。
発展性：将来の資料公開に備え、資料の蓄積に努めている。

２．定量的評価

観点	ＣＤ作成	ＣＤ作成（インデックス付与済み）	ＤＶＤ・ＢＤ作成（映像資料）	ＤＶＤ作成（画像資料）		
判定	A	A	A	A		

判定理由
ＣＤ作成・ＣＤ作成（インデックス付与済み）・ＤＶＤ・ＢＤ作成（映像資料）：これまでの水準を維持している。
ＤＶＤ作成（画像資料）：本年度から本格的に着手したものであり、今後とも順調な作業水準を期待できる。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定量的評価において、これまでの水準を維持していることに加え、画像資料の媒体変換についても本格的な事業を展開している。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	事業は、従来の水準を維持している。また、将来的なデータベース公開へ向け、資料作成を着実に進めている。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6113

（様式１）

業務実績書

研№51

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化		
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実((1)－①)		
【事業概要】 文化財情報の特性について具体的な資料の研究に基づいて検討を加え、それに最も適した電子化・情報化の方法を探り実際のデータベース入力を進める。			
【担当部課】	企画調整部	【プロジェクト責任者】	企画調整部長　難波洋三
【スタッフ】 森本晋（文化財情報研究室長）			
【主な成果】 文化財情報電子化の研究を通じて、GIS を活用した文化遺産情報の取得・分析に関する最新の手法を開発するとともに、研究成果を学会で発表している。開発・改良を継続している各種データベースについて、業務用とともに公開用についても、記載方法の標準化を進めながらデータの充実を図った。			
【年度実績概要】 ・　文化財情報電子化の研究として、GIS（地理情報システム）の技術を活用した考古情報の分析に関する調査研究を行い、成果を地理情報システム学会で発表した。資料調査として関連学会の中でも重要な地球惑星科学連合に参加した。遺跡・遺物情報電子化の研究成果を『遺跡情報交換標準の研究　第３版』として公表した。 ・　文化財情報データベースの充実として、従来より進めている遺跡、写真、報告書抄録、航空写真、図面画像等のデータベースについてデータの入力・更新を行うとともに、新規公開用データベースとして陶硯データベースを作成した。			
【実績値】 研究発表件数　１件（①） 研究成果報告書　１冊（②） （参考値） データベース件数　平成 24 年度末　ただし（　）内は平成 23 年度末の値 全文 212,709（212,650）、木簡 151,098（149,724）、抄録 74,755（65,688）、写真 402,732（369,706）、遺跡 477,822（462,042）、航空写真 1,334,996（1,299,667）、図面画像 71,081（61,783）、陶硯 1,092			
【備考】 研究会発表 ①村尾吉章・碓井照子・森本晋・清水啓治・清野陽一・藤本悠・玉置三紀夫「地理情報標準に準拠した遺構情報モデルの RDB への実装」『日本地理情報システム学会第 21 会研究発表大会予稿集』2012.10 研究成果報告書 ②森本晋『遺跡情報交換標準の研究　第３版』2013.3			

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6113

自己点検評価調書

研№51

１．定性的評価

観点	適時性	正確性	独創性	継続性	発展性	
判定	A	A	A	A	A	

判定理由
適時性:最近に刊行された発掘調査報告書の記述も参照してデータ入力を行っており、十分に成果が認められた。
正確性:データ入力に際し、典拠資料や関連文献の調査を行っており、正確性を十分に担保できた。
独創性:当研究所独自のデータベースを開発･整備して研究に資するとともに､公開用データベースを充実させており、独創性は十分に成果が認められた。
継続性:各種データベースを最新情報に更新しながら、広く継続的に公開提供しており、十分に成果が認められた。
発展性:本年度は新規に陶硯データベースを公開しており、十分に成果が認められた、

２．定量的評価

観点	研究発表件数	研究成果報告書数				
判定	A	A				

判定理由
研究発表件数：継続的に研究を行い、早期に成果を公表しているので目標を達成している。
研究成果報告書数：継続的な研究成果をまとめて公表しており、目標を達成している。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業は、適時性・正確性・独創性・継続性・発展性のいずれの観点においても、十分な水準を維持しており、総合的にＡと判定した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各データベースにおいて、着実にデータの充実が進んでおり、新規データベースの公開も行うことができた。全体として当初計画通りに進捗しているので順調と判定した。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6121

（様式１）

業務実績書

研№52

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	専門的アーカイブの充実（資料閲覧室運営）（(1)－②）		

【事業概要】

文化財関連資料の公開機関としての周知の広がりを踏まえ、①受け入れた文化財関連の図書などの文字資料や、作成したアナログ・デジタル画像資料の登録管理、②閲覧室で月・水・金の週 3 回の一般利用者へ所蔵資料の提供、③データベースの作成、検索システムの構築・ウェブサイト上での諸情報の提供を通常業務とするとともに、提供する資料や情報の質に主眼を置き、より専門性の高い文化財関連資料や情報の収集・構築・公開の場として専門的アーカイブの充実を図る。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長　綿田稔

【スタッフ】

田中淳（企画情報部長）、山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、城野誠治（専門職員）、井上さやか（アソシエイトフェロー）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、中村明子（アソシエイトフェロー）、鳥光美佳子（アソシエイトフェロー）、飯島満（無形文化遺産部音声・映像記録研究室長）、佐野千絵（保存修復科学センター保存科学研究室長）

【主な成果】

資料閲覧室の運営、ならびに資料の登録と情報のデータベース化、またそれを利用した外部公開用 SQL データの更新・運用を行った。

【年度実績概要】

・資料閲覧室を公開運営した（合計 139 日、利用者数のべ 1,139 人）。
・資料の登録と情報のデータベース化を継続した。
・断片化しがちな情報登録システムの整理統合に着手するための協議を行った。
・情報を外部公開データベースに登録し、基礎情報を一般に提供した。
・関係各部署の協力を得て劣化が進む資料類の保護対策の一環として貴重雑誌のデジタル画像化を進めた。
・セインズベリー日本芸術研究所との協力関係構築への取り組みと有効な日本芸術研究の基盤形成のための協議を行った。

【実績値】

研究協議会の開催　8 回
（24 年 4 月 9 日、4 月 24 日、5 月 22 日、6 月 19 日、7 月 24 日、9 月 11 日、10 月 16 日、1 月 9 日）
資料受入数：和漢書 885 件、洋書 41 件、展覧会図録・報告書等 3,868 件、雑誌 2,229 件（合計 7,023 件）
データベース公開件数：15 件（その他、内部運用 35 件）
閲覧室利用状況：公開日総数 139 日・利用者年間合計 1,139 人

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6121

自己点検評価調書

研№52

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性	独創性	効率性
判定	A	A	A	A	A	A

判定理由
適時性：資料閲覧室の公共性と特徴に則った運営をすることができた。
発展性：汎用性のある情報を自前でデータベース化し、国外との連携も模索している。
継続性：研究基盤の形成を重視し、中長期的視野に立って業務を遂行している。
正確性：文化財専門機関としてより正確な情報提供を実践している。
独創性：東京文化財研究所の業務に密着した、特徴あるデータ整理を行っている。
効率性：細分化されたデータベースの統合を目指すことで、効率化を図っている。

２．定量的評価

観点	研究協議会の開催数	資料受入数	データベースの公開件数	閲覧室利用者数		
判定	S	A	A	A		

判定理由
研究協議会の開催数：目標値の４回を上回った
資料受入数：和漢書 885 件、洋書 41 件、展覧会図録・報告書等 3,868 件、雑誌 2,229 件（合計 7,023 件）
データベース公開件数：15 件（その他、内部運用 35 件）
閲覧室利用状況：公開日総数 139 日・利用者年間合計 1,139 人
いずれも十分なものと判断する。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	実施計画に沿って遂行することができた。セインズベリー日本芸術研究所との協力関係についても具体化に向けた協議が順調に進んでいる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度以降も、より質の高い専門的文化財アーカイブの充実を目指していきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6122

（様式１）

業務実績書

研№53

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供((1)－②)

【事業概要】

文化財に関する資料・図書を計画的に収集・整理し、外部の研究者及び一般の利用者に積極的に公開・提供するための方策を検討し、実施する。

【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中 康成

【スタッフ】

渡　勝弥（文化財情報係長）

【主な成果】

遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物の購入及び寄贈による収集を行い、整理された資料をデータベースに蓄積してインターネットに公開した。

【年度実績概要】

・図書等の収集・整理:

遺跡の発掘調査報告書、歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心とする資料の収集・整理を行った。また、国立情報学研究所が構築しているオンライン共同分担目録方式による全国規模の総合目録データベース(NACSIS-CAT)への新規及び遡及入力の継続等、所外の利用者への情報提供を行った。

図書資料以外では、発掘調査関係の遺跡、建造物、庭園等の写真の収集、整理を行った。

・利用者サービス:

歴史・考古学分野を中心に図書・逐次刊行物等を一般公開施設として広く利用に供し、遠隔地からの図書利用については、国立情報学研究所が行なっている NACSIS-ILL を通じて文献複写・現物貸借サービスを行った。

【実績値】

(参考値)

受入数：

購入図書　710 冊
寄贈図書　7,638 冊
雑誌　1,352 タイトル
写真　577 点

利用者サービス：

一般利用者数　525 人
利用冊数　3,162 冊
来館者複写件数　1,098 件

遠隔利用：

複写受付件数　707 件
貸借貸出冊数　156 冊

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6122

自己点検評価調書

研№53

１．定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				

判定理由
適時性：要求のあった図書資料等を積極的に収集・整理・公開を行った。
継続性：図書資料等の収集・整理・公開を滞ることなく遂行した。

２．定量的評価

観点						

判定理由

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	資料の収集・整理・公開を滞りなく実施することができた。また、利用者サービスも適切に行った。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	資料の収集、整備及び情報サービスの提供が滞りなく行われた。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6211

（様式１）

業務実績書

研№54

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（年報、概要、ニュース）（(2)－①）

【事業概要】

本プロジェクトは研究所の業務に関する情報発信のうち特に紙媒体である『年報』『概要』『ニュース』、及び不定期に作成するパンフレットなどの編集・刊行を実施する。また、エントランスにおけるパネル展示などを通じて、来訪者に対しても研究所の活動をわかりやすく伝えることを目指す。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長　二神葉子

【スタッフ】

田中淳（企画情報部長）、山梨絵美子（副部長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、城野誠治（専門職員）、中村明子（アソシエイトフェロー）、井上さやか（アソシエイトフェロー）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、鳥光美佳子（アソシエイトフェロー）

広報委員（概要）：岡田健（保存修復科学センター長）　各部門概要担当：安孫子卓史（研究支援推進部管理室企画渉外係員）、塩谷純（企画情報部近・現代視覚芸術研究室長）、高桑いづみ（無形文化遺産部無形文化財研究室長）、今石みぎわ（無形文化遺産部研究員）、犬塚将英（保存修復科学センター主任研究員）、友田正彦（文化遺産国際協力センター保存計画研究室長）

広報委員（年報）：田中淳（企画情報部長）　各部門年報担当：崎部剛（前研究支援推進部管理室総務係長）、平出秀文（研究支援推進部管理室総務係長）、津田徹英（企画情報部文化形成研究室長）、高桑いづみ（無形文化遺産部無形文化財研究室長）、早川典子（保存修復科学センター主任研究員）、山内和也（文化遺産国際協力センター地域環境研究室長）

広報委員（東文研ニュース）：宮田繁幸（無形文化遺産部長）、安孫子卓史（研究支援推進部管理室企画渉外係員）、今石みぎわ（無形文化遺産部研究員）、吉田直人（保存修復科学センター主任研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）

【主な成果】

年報 2011 年度版、概要 2012 年度版を編集、発行した。また、東文研ニュースを年 4 回、東文研ニュースダイジェスト（英語）を年 2 回発行した。

【年度実績概要】

・「年報」2011 年度版の刊行

2012 年 5 月 31 日付で年報を刊行した。2011 年度版の構成は従来通り、機構、年度計画及びプロジェクト報告、その他の研究活動、個人の研究業績、研究交流、主な所蔵資料、研究所関係資料、東京文化財研究所プロジェクト索引とした。発行にあたっては、各部・センターの年報担当者が原稿のとりまとめを行った。

・「概要」2012 年度版の刊行

「概要」2012 年度版を刊行した。各ページの構成の決定や原稿のとりまとめについては、各部・センターの概要担当者が行った。

・「東文研ニュース」の刊行

「東文研ニュース」を年 4 回発行した。基本的には、ウェブサイトに掲載した活動報告から四半期ごとの記事を掲載しているが、掲載する記事は各部・センターで選択している。ページ数は固定せず原稿の多寡によって自由に構成し、記事の配置については会議や研究会と現地調査とがバランスよく並ぶようにして見た目の印象にも配慮した。この他、東文研ニュースには、特定のトピックについてまとまった紹介を行うコラムや刊行物の案内、人事異動などを掲載している。

「東文研ニュース」の英語版である「Tobunken News Digest」を年 2 回発行し、外国への情報発信にも努めた。

・エントランスロビーパネル展示の実施

エントランスロビーに研究成果を伝えるためのパネルを作成し、展示した。24 年度は昨年度予算で作成した文化財レスキュー活動に関する展示を行い、24 年度末に企画情報部による横山大観「山路」に関するパネルを作成し、展示した。

【実績値】

刊行物数　『東京文化財研究所年報』2011 年度版　900 部
『東京文化財研究所概要』2012 年度版　5,000 部
『東文研ニュース』第 49 号　3,500 部、50 号～52 号　各 1,000 部
『東文研ニュースダイジェスト』（英語版）第 12 号・第 13 号　各 3,500 部

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6211

自己点検評価調書

研№54

１．定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

判定理由
適時性：適切な時期に刊行物を発行することができた。
効率性：編集費用についてはできるだけ内製化することで予算削減に努めた。
継続性：継続的に刊行物を作成した。
正確性：概要・年報については５回程度の校正をそれぞれ実施することで、情報の正確性を維持した。

２．定量的評価

観点	刊行物数					
判定	A					

判定理由
刊行物数：前年度の配布実績に基づき、適切な数量の刊行物を発行した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東文研ニュース、Tobunken News Digest により、継続的、定期的に情報発信を行うことができた。東文研ニュース、東文研ニュースダイジェストの発行部数は情報発信が徐々にウェブが主流になりつつある昨今の事情を踏まえたことと、前年度までの印刷物について大量の在庫が存在していたことから、発行部数を大幅に減らした。次年度以降は、概要及び東文研ニュースは研究支援推進部と連携の上、できるだけ早期の発行によりさらなる情報の活用の促進を図るとともに、費用対効果の向上に努める。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	概要、年報及び東文研ニュースの発行を順調に実施することができた。次年度以降も、これらの媒体による情報発信を継続するとともに、より効果的な情報発信の方法について検討し、ウェブサイトその他インターネットによる情報発信との連携にも努める。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6212

（様式 1）

業務実績書

研№55

中期計画の項目	6　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（『平成 23 年版日本美術年鑑』、『美術研究』）（(2)－①）

【事業概要】

各年の美術活動と美術研究、批評の状況を記録するために、昭和 11 年以来刊行を続けている『日本美術年鑑』を年 1 冊刊行するとともに、昭和 7 年 1 月以来、日本・東洋の古美術、日本の近代・現代美術等に関わる研究論文・図版解説・書評、展覧会評、研究資料、研究ノート等を掲載する『美術研究』を年 3 冊刊行する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術室長　塩谷純

【スタッフ】

田中淳（企画情報部長）、山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）、中野照男（客員研究員）、相澤正彦（客員研究員）、三上豊（客員研究員）、吉田千鶴子（客員研究員）、森下正昭（客員研究員）

【主な成果】

本年度は、『平成 23 年版　日本美術年鑑』及び『美術研究』407～409 号を刊行した。

【年度実績概要】

①『平成 23 年版　日本美術年鑑』　B5 版

2010（平成 22）年美術界年史、美術展覧会（企画展、作家展、団体展）、美術文献目録（定期刊行物所載文献、美術展覧会図録所載文献（企画展、作家展））、物故者

②『美術研究』407 号

邢義田（檜山満照訳）「漢代画像解読法試論―「撈鼎図」を例として―」

綿田稔「永享七年の竹庵大縁をめぐる画事より―松岡美術館の周文画とケルン東洋美術館の霊照女図―」

塩谷純「秋元洒汀と明治の日本画（二）」

津田徹英「書評　伊藤大輔『肖像画の時代　中世形成期における絵画の思想的深層』」

③『美術研究』408 号

津田徹英「佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』の制作時期をめぐって」

皿井舞「研究資料　京都・神光院蔵　木造地蔵菩薩立像」

綿田稔「研究資料　御絵鑑―元禄十三年板の画法書―」

④『美術研究』409 号

朴銀卿・韓政鎬（金正善訳）「四天王像配置形式の変化原理と朝鮮時代の四天王名稱」

山梨絵美子「台北市で開催されたふたつの陳澄波展―台北市立美術館「行過江南―陳澄波芸術探索歴程」展と至善芸文センター「豔陽下的陳澄波」展―

小林達朗「研究ノート　東京国立博物館所蔵 虚空蔵菩薩像」

【実績値】

刊行物件数

『日本美術年鑑』刊行数　1 点　（①）

『美術研究』刊行数　　3 点　（②～④）

配布部数

『日本美術年鑑』刊行部数　600 部　　配布部数　600 部（①）

『美術研究』刊行部数　各 400 部　　配布部数　各 380 部（②～④）

【備考】

①『平成 23 年版　日本美術年鑑』東京文化財研究所　2013. 3

②『美術研究』407 号　東京文化財研究所 2012. 8

③『美術研究』408 号　東京文化財研究所 2013. 1

④『美術研究』409 号　東京文化財研究所 2013. 3

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6212

自己点検評価調書

研№55

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性	継続性		
判定	A	A	A	A		

判定理由
適時性、発展性：
『美術研究』において、学界で話題となった図書や展覧会を書評や展評で取り上げ、またこれまで等閑視されていた作品や資料を紹介しながら論じるなど、十分に成果が認められた。
正確性、継続性：
1936 年以来刊行を続けている『日本美術年鑑』において、2010 年の美術界に関する基礎データの集成に努め、十分に成果が認められた。

２．定量的評価

観点	刊行物件数	配布部数				
判定	A	A				

判定理由
刊行物件数：目標値を 100％達成した。
配布部数　：目標値を 100％達成した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	『美術年鑑』1 冊『美術研究』3 冊を当初の計画通り、刊行するとともに、内容の充実を図り、この点は十分に評価できる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画にあげた実施状況は、順調である。次年度は、『日本美術年鑑』のウェブへのデータ公開の迅速化を図るとともに、同年鑑創刊以前のデータについても補完を目指したい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6213

（様式１）

業務実績書

研№56

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整理及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（『無形文化遺産研究報告』、『無形民俗文化財研究協議会報告書』）（(2)－①）

【事業概要】

無形文化遺産部スタッフによる業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』及び民俗文化財保護行政担当者、無形民俗文化財保存関係者、研究者の参加を得て開催する無形民俗文化財研究協議会の事例報告・総合討議を内容とする『無形民俗文化財研究協議会報告書』を刊行する。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸

【スタッフ】

高桑いづみ（無形文化遺産部無形文化財研究室長）、飯島満（音声・映像記録研究室長）、今石みぎわ（研究員）

【主な成果】

（１）無形文化遺産部研究員の業績に基づく論考・報告・資料紹介等を内容とする『無形文化遺産研究報告』第 7 号を 25 年 3 月 29 日に刊行した。

（２）24 年 10 月 26 日に開催した無形民俗文化財研究協議会での事例報告・総合討議を内容とする『第 7 回無形民俗文化財研究協議会報告書』を 25 年 3 月 29 日に刊行した。

【年度実績概要】

（１）『無形文化遺産研究報告』第 7 号を以下の内容で刊行した。

「山口鷺流狂言の小舞謡―無形文化遺産部所蔵「山口鷺流小舞謡」の記録をめぐって―」高桑いづみ

「「栄二譜」試論」星野厚子

「ボルネオ島サラワク州における削りかけ状木製具について」今石みぎわ

「〔資料紹介〕梅村豊撮影歌舞伎写真（四）」原田真澄

「国立音楽大学附属図書館寄贈　竹内道敬旧蔵音盤目録（5）」飯島満

（２）『第 7 回無形民俗文化財研究協議会報告書』を以下の内容で刊行した。

［第 1 部　報告］

「津波から 100 kmのまちで」飯坂真紀（ふるさと岩手の芸能とくらし研究会）

「被災地のおける民俗調査の在り方―震災前からの調査と震災後からの調査―」小谷竜介（宮城県教育庁文化財保護課）

「記録 DVD『3.11 東日本大震災を乗り越えて』について」阿部武司（東北文化財映像研究所）

「民俗資料・記録の活用に向けて―福島県の被災地から―」大山孝正（福島県文化財センター白河館まほろん）

「被災者と人類のための災害復興アーカイブ―311 まるごとアーカイブスの取り組み―」長坂俊成（防災科学技術研究所）

「特別報告　記録 DVD『3.11 東日本大震災を乗り越えて』について」阿部武司（東北文化財映像研究所）

［第 2 部　総合討議］

コメント・ディスカッション　参考資料

【実績値】

刊行数　2 部（『無形文化遺産研究報告』第 7 号、2013.3.29『第 7 回無形民俗文化財研究協議会報告書』）2013.3.29

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6213

自己点検評価調書

研№56

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			

判定理由
適時性：今年度の研究・調査を踏まえた成果を発表している。
独創性：無形の文化遺産を専門に扱う数少ない報告書であり、それに相応しい内容となっている。
発展性：情報の多様さ豊富さの点で、有用性が高い。

２．定量的評価

観点	刊行数					
判定	A					

判定理由
予定通りの刊行数を達成している。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	無形の文化遺産の報告書として、情報が豊富で質の高い研究報告が掲載されている。関係機関や専門研究者へ配布した後、広範な研究分野からの要請にも資するため、すみやかにＰＤＦでの公開もなされてきている。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り年間２冊の報告書が刊行されており、目的を順調に達成している。今後もこのペースの維持を目指す。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6214
（様式１）

業務実績書

研№57

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（『保存科学』５２号）（(2)－①）		

【事業概要】
保存修復科学センター・文化遺産国際協力センターで行われた文化財の保存・修復に関する調査・研究成果の公開を目的に、年１回研究論文集『保存科学』を刊行する。様々な文化財の科学的調査結果や基礎研究に関する論文、受託研究に関する研究報告・修復処置報告などを掲載する。また、より一層の研究成果の公開に努めるため、『保存科学』掲載論文の電子化を行い、インターネット上での公開を行う。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長　岡田健

【スタッフ】
佐野千絵（保存修復科学センター保存科学研究室長）、朽津信明（修復技術研究室長）、川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）、石崎武志（副所長）

【主な成果】
本年度の投稿件数は 27 件であった。全投稿原稿に対して、外部の査読者も含む査読委員による査読を実施し、報文 4 件、報告 22 件、取下 1 件、計 26 件の掲載を決定した。版型 B5 版、口絵カラー16 頁、本文総ページ数 320 頁、発行部数 650 部、関係諸機関に約 580 部配布。

【年度実績概要】
岡田健（保存修復科学センター長）、川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）、石崎武志（副所長）、神庭信幸（東京国立博物館学芸研究部保存修復課長）、稲葉政満（東京藝術大学大学院美術研究科教授）の５名からなる編集委員会を編成した。本年度の投稿件数は 27 件。全投稿原稿に対して、査読委員（保存修復科学センター及び文化遺産国際協力センターの正職員、編集委員、及び外部査読者）による査読を実施し、報文 4 件、報告 22 件、取下げ 1 件、計 26 件の掲載を決定した。

本年度は、査読者による再査読が可能とするため、試験的に例年より査読期間、改訂期間を短く設定した。この影響について、著者、査読者に対してアンケートを行い、次年度以降の編集日程の検討に役立てる資料とした。また、編集委員会において、投稿規定の一部改訂、査読規定に伴う査読の手引きを編集委員会において作成し、明文化した。査読の手引きの正式な適用は次年度からとする。

【実績値】
刊行数　1 件（①）
印刷部数　650 部
配布部数　約 580 部

【備考】
刊行数
①『保存科学第』５２号、2013.03

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6214

自己点検評価調書

研№57

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

判定理由
適時性：今回掲載した 26 本の報文・報告は、最新の調査や研究結果を公表するものである。
独創性：今回掲載した 26 本の報文・報告は、査読により新規性が確認できた。
発展性：今回掲載した 26 本の報文・報告はきわめて多様である。
効率性：12 月第 2 週の締め切りから 3 月の発行・発送まで、きわめて効率的である。
継続性：質・量ともに他の雑誌より抜きん出ている。
正確性：今回掲載した 26 本の報文・報告は、査読により内容の正確性が保証されているため。

２．定量的評価

観点	刊行数	印刷部数	配布部数			
判定	A	A	A			

判定理由
刊行数、印刷部数、配布部数：いずれも目標を達成した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	質の高い報文と報告が多く掲載され、刊行物として、またインターネットでの公開を通じて、国内外の研究者にとって重要な情報源として確立している。今後も現在の方法での公開を継続するが、インターネット公開に関しては、より使いやすい形を追求していきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度は、査読者による再査読が行われており、より論文の水準が上がった状況となった。論文の質を一定水準以上に維持するために、投稿規定及び査読規定の一部改正等を行った。次年度以降、投稿規定・査読規定に基づいてより厳正な論文審査を行い、質の高い学術論文誌として定着することを目指す。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6215

（様式 1）

業務実績書

研№58

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	第 35 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会報告書の刊行（(2)－①）

【事業概要】

平成 23 年度に「染織技術の伝統と継承―研究と保存修復の現状―」をテーマとし、無形文化遺産部の担当で開催された国際研究集会の報告書を作成し、関係者に配布する。

【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	無形文化遺産部長　宮田繁幸

【スタッフ】

高桑いづみ（無形文化遺産部無形文化財研究室長）、飯島満（音声・映像記録研究室長）、菊池理予（研究員）、今石みぎわ（研究員）、星野厚子（研究補佐員）、綿貫潤（研究補佐員）、佐野真規（研究補佐員）

【主な成果】

24 年 11 月 30 日に報告書『第 35 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会　染織技術の伝統と継承―研究と保存修復の現状―』を刊行。関係者に配布した。

【年度実績概要】

目次：

基調講演

１.「染織技法の伝承-技法の変化・置き換え・相互関係」長崎　巌

２.「染織史における復元的研究―江戸時代の小袖に見る染織技法を中心に―」河上繁樹

セッションⅠ　染織技術を守る

１.「日本における染織技術保護の現状と課題―わざを守り伝えるために―」菊池理予

２.「韓国刺繍史とその再現作業―刺繍匠「韓尚洙」の歩み―」韓尚洙・金䟽蘭

３.「織物技術について、現場からの報告」北村武資

４.「繊維の王、絹と共に 60 年―刺繍の今昔と伝承の現在と提案―」福田喜重

セッションⅡ　染織品保存修復のいま

５.「メトロポリタン美術館の染織品収蔵管理に携わって―1966 年 3 月～2003 年 8 月―」梶谷宣子

６.「The Textile Conservation Workshop at the Abegg-Stiftung: The History and Present Situation of Textile Conservation in Switzerland」ベティーナ・ニーカンプ

７.「染織品保存修理の理念」小林彩子

８.「正倉院宝物にみる染織品の保存修復の歴史」田中陽子

９.「染織文化財を伝える―修理の現場から―」城山好美

10.「『紋縮緬地熨斗文友禅染振袖』修理の報告―染屋が修理を始めたら―」矢野俊昭

11.「日本刺繍と染織品の修復」岡田宣世

セッションⅢ　染織技術へのまなざし

12.「Ties That Bind: The Transmission of Shibori to The United States and Beyond」シャロン・タケダ

13.「Fascination for the Foreign: The Appreciation and Appropriation of ‘Exotic’ Textiles in Europe and Japan」アンナ・ジャクソン

14.「室町時代の舞楽装束にみる染織技術-織物にみる糸質・織組織を中心に-」小山弓弦葉

15.「絵画史研究は染織技術を明らかにすることができるか-中世職人歌合絵を起点として-」土屋貴裕

セッションⅣ　染織技術をつたえる

16.「無形文化財工芸技術分野における後継者育成について」佐々木正直

17.「イギリスにおける染織品保存修復士の教育」石井美恵

18.「大学教育における染織技術の伝承と保存に関する取り組み」深津裕子

【実績値】

刊行数　1

参考

総ページ数：284 ページ

刊行部数： 650 部

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6215

自己点検評価調書

研№58

１．定性的評価

観点	適時性	継続性	効率性			
判定	A	A	A			

判定理由
適時性：シンポジウム終了後、時間的に大きく隔たることなく報告書を刊行できた。
継続性：本報告書の刊行により、昨年のシンポジウムで話題となった当該分野の継続的検討のための基礎ができた。
効率性：年度内の比較的早い時期に報告書をまとめ、刊行することができた。

２．定量的評価

観点	刊行数					
判定	A					

判定理由
年度内に報告書を刊行することができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	昨年のシンポジウムの内容を、全て報告書としてまとめるとこが出来た。刊行時期も例年より早く、本テーマの継続的な取り組みの基礎を提供することができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の予定通り、報告書を刊行することができた。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6216

（様式１）

業務実績書

研№59

中期計画の項目	６ 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行（(2)－①）

【事業概要】

文化財に関する調査・研究に基づく成果について、定期的な刊行物を発行する。

【担当部課】	奈良文化財研究所	【プロジェクト責任者】	所長　松村恵司

【スタッフ】

【主な成果】

紀要等２点、ニュース２種８点、合計10点を刊行した。

【年度実績概要】

・紀要等

『奈良文化財研究所紀要2012』2012.6月刊、3,000部

『奈良文化財研究所概要2012』2012.7月刊、3,000部

・ニュース

『奈文研ニュース』NO.45,2012. 6月刊,3,000部

『奈文研ニュース』NO.46,2012. 9月刊,3,000部

『奈文研ニュース』NO.47,2012.12月刊,3,000部

『奈文研ニュース』NO.48,2013. 3月刊,3,000部

『埋蔵文化財ニュース』NO.150（マイクロフォーカスＸ線ＣＴを用いた木造神像彫刻の非破壊年輪年代調査(2)）、2013.3月刊、2,500部

『埋蔵文化財ニュース』NO.151（東日本大震災の文化財レスキュー－奈文研の活動－）、2013.3月刊、2,500部

『埋蔵文化財ニュース』NO.152（災害時における奈良文化財研究所の支援）、2013.3月刊、2,500部

『埋蔵文化財ニュース』NO.153（2011年度埋蔵文化財関係統計資料）、2013.3月刊、2,000部

紀要２０１２　　概要２０１２

【実績値】

刊行数：紀要１点、概要１点、奈文研ニュース４号、埋蔵文化財ニュース４号、計４種10点

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6216

自己点検評価調書

研№59

１．定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性			
判定	A	A	A			

判定理由
適時性：調査研究の成果を適時に刊行できた。
継続性：継続的な定期刊行物として刊行できた。
正確性：調査報告としての正確性は十分であった。

２．定量的評価

観点	刊行数					
判定	A					

判定理由
刊行数：当初の計画どおりに刊行することができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定期刊行物は、研究成果を公表するものとして計画的に発行できた。次年度も多様な研究成果、特に継続的な調査研究の成果を専門家だけでなく、一般の方にもわかりやすい形での刊行に努めたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	紀要、概要、ニュースの刊行は計画どおり順調に実施できた。 次年度も計画どおりに刊行するとともに、よりわかりやすい形での刊行に努める

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6221

（様式 1）

業務実績書

研№60

中期計画の項目	6　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	第 36 回　文化財の保存と修復に関する国際研究集会((2)－②)

【事業概要】

第 36 回 文化財の保存と修復に関する国際研究集会「文化財の微生物劣化とその対策：屋外・屋内環境、及び被災文化財の微生物劣化とその調査・対策に関する最近のトピック」を開催した。

【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	生物科学研究室長　　木川りか

【スタッフ】

岡田健（保存修復科学センター長）、佐藤嘉則（研究員）、中山俊介（近代文化遺産研究室長）、早川典子（主任研究員）、佐野千絵（保存科学研究室長）、犬塚将英（主任研究員）、早川泰弘（分析科学研究室長）、吉田直人（主任研究員）、朽津信明（修復材料研究室長）、森井順之（主任研究員）、北野信彦（伝統技術研究室長）、小野寺裕子（研究補佐員）、藤井義久（客員研究員）、三浦定俊（客員研究員）、高妻洋成（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長）、神庭信幸（東京国立博物館学芸研究部保存修復課長）

【主な成果】

24 年 12 月 5 日～7 日、東京国立博物館平成館講堂にて、文化財の保存と修復に関する国際研究集会（第 36 回）を開催した。口頭発表による講演と、公募した 23 件のポスター発表が行われた。

【年度実績概要】

・講演者、座長との交渉、決定
・案内用サーキュラー・宣伝ポスター発行
・ポスターセッション募集、審査
・プレプリント（発表要旨集）編集・発行
・国際研究集会（24 年 12 月 5 日～7 日）参加者数 232 名（内 国内 212 名、国外 20 名）

・生物被害をテーマとした本国際研究集会において、被災文化財の微生物被害の特徴や微生物種の調査結果、被災文化財の処理法などについての最新の調査結果を公表した。また、石造文化財の保存と修復に関するセッションでも、研究所で取り組んできた研究成果を発表し、イタリア、カナダ、ドイツ、フランス、韓国、中国など、海外の研究者と積極的な研究交流を行った。

【実績値】

文化財の保存と修復に関する国際研究集会（第 36 回）の開催 1 回 24 年 12 月 5 日～7 日（東京国立博物館平成館）
アンケート評価（87 件）
「大変有意義であった」61%
「有意義であった」　37%
「妥当」　2%
「物足りなかった」　0%

【備考】

プログラム・予稿集を作成した。

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6221

自己点検評価調書

研№60

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	S	A	A	A

判定理由

適時性：被災文化財の生物劣化に関するセッションは、緊急性が高く、この時期に国際研究集会として国際的に情報を共有し、情報交換を行うことは極めて時機を得ている。また、他のテーマのセッションについても、国際的な研究の動向を共有する点で意義深く、極めて顕著な成果が認められる。

独創性：文化財の生物劣化のなかでも、微生物劣化にテーマを絞った国際研究集会はほとんど開催されておらず、招待講演者の他にも、フランス、ドイツ、韓国、中国などの海外の国々から自費で参加した参加者もいたことは特筆に値する。

発展性：今回は、国内、海外からも学生など若い参加者や、大学関係者などが多数参加し、今後、文化財の微生物劣化の対策が非常に重要なテーマになっていくことを感じるものであった。今後のこの分野の発展に大きな影響を与えるものと考える。

効率性：十分な成果が認められるが、少ないスタッフで、事務局を運営し準備、交渉、編集作業などを実施した事務作業も非常に多いのでより一層効率的に作業を進める工夫をすべきと考える。

継続性：本研究集会は、研究所で毎年開催しているもので、アンケート結果（後述）をみても、質や内容の点でも十分な成果が認められるものと考える。

正確性：会場のスペースなどを考慮し、ポスター発表の募集数を 20 件としたところ、最終的には 23 件のポスター発表が実施されることとなったが、募集数と応募数はほ同じくらいの件数であり、計画のうえでも無理はなかったと考える。

２．定量的評価

観点	開催数	アンケート評価				
判定	A	A				

判定理由

開催数：予定通り順調に国際研究集会を開催した。

アンケート評価：参加者によるアンケート回収結果（87 件）を集計した結果、「大変有意義であった」が 61%、「有意義であった」が 37%、「妥当」が 2%、「物足りなかった」が 0%という結果であった。この結果からも、今回の題材について、参加者に十分満足をしてもらえるものになったと考える。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	海外からの参加者、国内の参加者双方が十分な意義を感じた研究集会であり、さまざまな参加者によって、積極的な情報交換や議論ができたため十分な成果が達成できたと考える。 また、一般参加費（9,000 円）については、少数ではあるものの、やや高いとの意見もあったため、次年度以降の検討課題となることも考えられる。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	専門的な内容にもかかわらず、講演者やポスター発表者にとどまらず、国内外から多くの参加者を得ることができた。また、参加者間で活発な議論や情報交換ができた。参加者からは内容、運営に対して高い評価を受けた。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6222

（様式 1）

業務実績書

研№61

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	平成 24 年度オープンレクチャー（(2)－②）		
【事業概要】 企画情報部の美術史研究の成果を一般に公表することを目的とする。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	企画情報部長　田中淳
【スタッフ】 山梨絵美子（企画情報部副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、中野照男（客員研究員）、相澤正彦（客員研究員）、三上豊（客員研究員）、吉田千鶴子（客員研究員）、森下正昭（客員研究員）			
【主な成果】 第 46 回企画情報部オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」と題して 4 講演を 2 日間にわたり開催した（参加者数：176 人、アンケートによる満足度：78%（回収率：68%）。			
【年度実績概要】 企画情報部では、研究成果を広く公表するために公開学術講座を毎年秋に開催しており、本年で 46 回目を迎えた。昨年度同様、本年度も金曜日と土曜日の午後、2 日間連続で開講し、聴講者の便宜を図るように努めた。「モノ／イメージとの対話」をテーマに掲げ、個々の講演内容は以下の通りである。なお、この講座は、上野の山文化ゾーン連絡協議会が主催して毎年秋に開く「上野の山文化ゾーンフェスティバル」の講演会シリーズのプログラムとしても位置づけられている。 今回は 2 日間でのべ 176 人の参加があり、参加者にアンケートを実施したところ、120 人から回答を得た（回収率:68%）。満足度に関する回答結果は、「たいへん満足した」47 人、「おおむね満足した」44 人、「普通だった」15 人、「不満が残った」0 人、無回答 14 人、回答者の 78%が満足感を得たことがわかった。 第 1 日目 24 年 10 月 19 日（金曜日）午後 1：30～4：30　東京文化財研究所地下セミナー室 「徳川霊廟を描いた画家たち」山梨絵美子（東京文化財研究所） 「上野モダンから近代文化体験へ―陳澄波が出会った近代日本―」白適銘（国立台湾師範大学） 第 2 日目 24 年 10 月 20 日（土曜日）午後 1：30～4：30　東京文化財研究所地下セミナー室 「連想が結ぶ美術史の点と線―アーカイブズから見えるもの―」丸川雄三（国際日本文化研究センター） 「1912 年 10 月 20 日・上野・美術」田中淳（東京文化財研究所）			
【実績値】 参加者数　176 人 満足度　　78%（回収率：68%）			
【備考】			

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6222

自己点検評価調書

研№61

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

判定理由
適時性：企画情報部の美術史研究の現今の最新成果を反映させて一般に公表を行い、十分に成果が認められた。
独創性・発展性：
「モノ／イメージとの対話」という独自の切り口で成果公表を行い、十分に成果が認められた。
継続性：企画情報部のオープンレクチャーの第45回目を行い、十分に成果が認められた。

２．定量的評価

観点	参加者数	満足度				
判定	A	A				

判定理由
参加者数・満足度：ともに目標を100％達成したため。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は海外の研究動向も含む研究成果の公表をすることができ、2日間で176名の参加者を得、また、参加者の満足度も78％という高い数字となった。次年度も文化財に関する調査・研究に基づく成果・新発見を、時宜に適応しながら、公表し、その参加者数、満足度においても目標値を満たすことを目指したい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100％達成したので順調と判定した。 中期計画の趣旨にそって次年度も文化財に関する調査・研究に基づく成果・新知見を、公開講演というかたちで、一般に公表することを目指したい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6223

（様式１）

業務実績書

研№62

中期計画の項目	６ 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	公開講演会、現地説明会等の開催（(2)－②）

【事業概要】

文化財に関する調査・研究に基づく成果について、公開講演会、現地説明会等の開催により、積極的に公開・提供する。

【担当部課】	研究支援推進部 連携推進課、研究支援課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中康成 研究支援課長　紅林孝彰

【スタッフ】村上加代子、米野元則、今西康益、三本松俊徳、飯田信男(以上、研究支援推進部)

【主な成果】

（１）公開講演会は、例年実施している定例公開講演会を２回､特別講演会（東京）と日中韓国際講演会(奈良)、飛鳥資料館特別展記念講演会を２回開催した。また、本年度は創立 60 周年を記念して日中韓の第一線で活躍する共同研究者による日中韓国際講演会を開催した。

（２）発掘調査に伴う現地説明会等を平城地区､飛鳥藤原地区あわせて計５回実施した｡このことにより調査研究成果を適時適切に国民に公開公表することができ、事業としては順調に実施できた。

【年度実績概要】

（１）公開講演会等

・第 110 回公開講演会 24 年 6 月 30 日(土)　聴講者数 250 人　場所:平城宮跡資料館講堂　講演者数 3 人　アンケート結果=回収数 149 人,回収率 59.6%,満足度 A=133 人(89.3%)/B=12 人(8%)/C=4 人(2.7%)

・第 111 回公開講演会 24 年 11 月 3 日(土)　聴講者数 200 人　場所:平城宮跡資　料館講堂　講演者数 3 人　アンケート結果=回収数 94 人、回収率 47%、　満足度 A=87 人(92.5%)/B=6 人(6.4%)/C=1 人(1.1%)

・特別講演会（東京会場）24 年 10 月 6 日(土) 聴講者数 400 人
場所: 一橋大学　一橋記念講堂　　講演者数 6 人
アンケート結果=回収数 159 人、回収率 39.8%,満足度 A=126 人(79.2%)/B=31 人(19.5%)/C=2 人（1.3%）

日中韓国際講演会

・日中韓国際講演会(奈良会場)24 年 10 月 20 日(土) 聴講者数 300 人
場所：なら 100 年会館　講演者 4 人
アンケート結果=回収数 90 人、回収率 30%、満足度 A=71 人(78.9%)/B=17 人(18.9%)/C=2 人（2.2%）

・飛鳥資料館春期特別展「比羅夫がゆくー飛鳥時代の武器・武具・いくさー」記念講演会　24 年 5 月 12 日（土）
参加者数　98 人　場所：飛鳥資料館講堂　講演者数　1 人、アンケート結果=回収数 77 人、回収率 77.7%
満足度 A=77 人(100%)/B=0 人/C=0 人

・飛鳥資料館秋期特別展「花開く都城文化」記念講演会　24 年 11 月 17 日（土）　参加者数　42 人
場所：飛鳥資料館講堂　講演者数 1 人　アンケート結果=回収数　31 人、回収率　77.5%、
満足度 A=31 人(100%)/B=0 人/C=0 人

（２）発掘調査現地説明会等

・平城第 491 次(平城京左京三条一坊一坪)1,872 ㎡、発掘調査現地説明会 24 年 6 月 23 日(土) 、参加者 652 人、報告者 1 人　アンケート結果=回収数 236 人、回収率 36.2% 満足度 A=101 人(42.8%)/B=133 人(56.4%)/C=2 人(0.8%)

・平城第 495 次(平城京左京三条一坊一・二坪) 1,845 ㎡,発掘調査現地説明会 24 年 9 月 15 日(土) 、参加者 635 人、報告者 1 人　アンケート結果=回収数 179 人、回収率 28.2% 満足度 A=107 人(59.8%)/B=72 人(40.2%)/C=0 人

・飛鳥藤原第 174 次(藤原宮朝堂院朝庭) 1,850 ㎡,発掘調査現地説明会 24 年 11 月 23 日(土) 、参加者 460 人、報告者 2 人　アンケート結果=回収数 76 人、回収率 16.5% 満足度 A=44 人(57.9%)/B=32 人(42.1%)/C=0 人

・平城第 500 次(薬師寺食堂) 1,300 ㎡、発掘調査現地説明会 25 年 1 月 26 日(土) 、参加者 714 人
アンケート結果=回収数 140 人,回収率 19.6% 満足度 A=96 人(68.6%)/B=39 人(27.8%)/C=5 人(3.6%)

・平城第 503 次（東院地区）1,015 ㎡、発掘調査現地説明会 25 年 3 月 30 日、参加者 820 人、
アンケート結果=回収数 257 人、回収率 31.3% 満足度 A=145 人(56.4%)/B=108 人(42%)/C=4 人(1.6%)

【実績値】

（１）公開講演会等開催回数　年 6 回開催

（２）発掘調査現地説明会等開催回数 年 5 回開催

(参考値)

（１）公開講演会等　聴講者延人数　1,290 人、　アンケート回収数　600 人、　回収率 46.5%
満足度 A=　525 人（87.5%)、B=　66 人（11.0%）　C=9 人（1.5%）

（２）発掘調査現地説明会等　参加者延人数 3,281 人内アンケート実施回数 5 回　回収数 888 人　回収率 27%
満足度 A=493 人(55.6%)/B=384 人(43.2%)/C=11 人(1.2%)

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6223

自己点検評価調書

研№62

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

判定理由
適時性：広く一般に公開し、その必要性に答えることができた。
独創性：公開は、内容の新規性及び卓越性を持たせ実施することができた。
発展性：聴講者は多数かつ多種にわたり、様々な分野への影響が期待される。
継続性：研究成果の継続的な公表、連続的な社会還元につながるものとなった。
正確性：多数が満足する正確性を持った内容であった。

２．定量的評価

観点	公開講演会等開催回数	発掘調査現地説明会等開催回数				
判定	A	A				

判定理由
公開講演会等開催回数：予定どおり実施できた。
発掘調査現地説明会等開催回数：予定どおり実施できた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	公開講演会については年６回実施し、発掘調査現地説明会等については、５回実施し、いずれも多数の参加者があった。これらの参加者に対して行ったアンケートでは、公開講演会では87.5%、発掘調査現地説明会では98.8%の方から「大変満足である」または「おおむね満足である」という結果を得ている。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	公開講演会、現地説明会の開催は計画のとおり順調に実施できたと考える。 今後もこのペースを維持しつつ、調査研究の成果に基づく講演、現地説明会等の内容及び配付資料の充実、アンケート調査による参加者ニーズの把握、さらには事業広報に力を注ぎ、参加者数の増加と満足度の向上に努めたい。

【書式Ｂ】　　施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6231

（様式１）

業務実績書

研№63

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	ウェブサイトの運用（(2)－③）		

【事業概要】

研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトの充実を図り、ウェブサイトへのアクセス件数を前期中期計画期間の年度平均以上確保する。

【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	情報システム研究室長　二神葉子

【スタッフ】

田中淳（企画情報部長）、山梨絵美子（副部長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、小林公治（広領域研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、城野誠治（専門職員）、中村明子（アソシエイトフェロー）、井上さやか（アソシエイトフェロー）、橘川英規（アソシエイトフェロー）、鳥光美佳子（アソシエイトフェロー）

広報委員（LAN）：川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）　各部門 LAN 担当：崎部剛（前研究支援推進部総務係長）、高砂健介（研究支援推進部管理室長）、綿田稔（企画情報部文化財アーカイブズ研究室長）、飯島満（無形文化遺産部音声・映像記録研究室長）、森井順之（保存修復科学センター主任研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター主任研究員）

【主な成果】

ウェブサイトのレイアウトを更新し、毎月の活動報告（和英）の掲載、また適宜イベント情報の公開を行うとともに、それら更新情報についてメールマガジンによる情報発信を行った。

【年度実績概要】

・ウェブサイトのリニューアルの継続

昨年度に引き続きウェブサイトのトップページ及び案内、活動報告等全所的な情報に関するページのレイアウトを変更し、各種の情報へのアクセスの利便性を向上させた。研究所の業務紹介としては、東京文化財研究所の刊行物（図書）について 2012 年までのデータを追加掲載した。

・ウェブサイトの適宜更新

各部・センターの調査研究、会議や研究会の開催等の活動について、日本語及び英語による「活動報告」として毎月掲載した。研究会開催や職員募集、入札公告などの情報については、依頼があり次第ただちに掲載した。

また、ウェブサイトの内容の充実を図り、『日本美術年鑑』（当研究所刊行）所載美術界年史（彙報）（1970 年から 2009 年まで）の掲載など、当研究所で蓄積しているデータの公開を実施した。さらに、東日本大震災後の対応：東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援事業に関連する活動や被災した文化財などへの対応について、ウェブサイトによる情報発信を行った。

・画像公開のためのシステムの検討

美術研究所の職員であった尾高鮮之助が撮影した東南アジア・南アジア・西アジア関係の画像 1,947 枚について、一般公開に向けて整理し、所内ウェブサイトで公開した。

・メールマガジンの発信

活動報告を含むウェブサイトの更新情報や、研究会開催、職員募集や入札公告などの情報を登録者に対して直接発信する手段として、メールマガジンの送信を随時行った。

・アクセス数

サーバの入替の際にアクセスログ保存期間の設定に誤りがあり、10 月～25 年 2 月のアクセスログが消失したことから、年間アクセス件数は不明である。ログが保存されている上半期及び 25 年 3 月で前年度と比較したところ、前年度が 806,339 件であったのに対し、本年度は 717,919 件と減少している。この原因は、黒田記念館のページへのアクセスが耐震補強工事による閉館に伴い大きく減少していることと考えられる。その他のページについては、前年度と同程度もしくはアクセス数は増加している。

【実績値】

ウェブサイトへのアクセス件数：717,919 件　（4 月～9 月及び 25 年 3 月の合計）

【備考】

（参考）年間アクセス件数補正値：1,230,718 件（上記 7 ヵ月間の月平均を 12 倍した値）

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 東京文化財研究所　　処理番号 6231

自己点検評価調書

研№63

１．定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	独創性	発展性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A

判定理由
適時性：速やかに情報の更新を行うことができた。
効率性：ウェブサイトのデザインの大きな変更は外部委託、日々の更新作業はアシスタントが担当するなど分担して効率的に更新を行うことができた。
継続性：活動報告の更新を毎月実施するなど、継続的に情報公開を行うことができた。
独創性：活動報告や美術界年史（彙報）など独自の情報を掲載することができた。
発展性：尾高鮮之助撮影写真の所内ウェブサイトでの公開のシステムを構築したことで、今後、その他の画像も含めた一般公開・活用のシステムを検討する上での基礎とすることができた。
正確性：ウェブサイトへの掲載の際は複数の担当者が記事の内容を確認することで、正確性を保つことができた。

２．定量的評価

観点	ウェブサイトアクセス件数					
判定	F					

判定理由
・サーバの入替の際にアクセスログ保存期間の設定に誤りがあり、10 月～2 月のアクセスログが消失したことから、年間アクセス件数は不明となってしまった。
　ログが保存されている上半期及び 25 年 3 月で前年度と比較したところ、前年度が 806,339 件であったのに対し、今年度は 717,919 件と減少している。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ウェブサイトの運用については、適時性、効率性、継続性、独創性、発展性、正確性が認められた。したがって実績の総合評価も十分な成果が認められると結論した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ウェブサイトの情報へのアクセスの利便性向上、データの充実、速やかな更新を実施することができた。しかし、ウェブサイトのアクセス件数については本年度を計測不能としてしまった。前年度と同じ期間で比べて減少したが、黒田記念館のページへのアクセス数の減少に伴うものであるため、一過性であると考える。このような実績から、当年度における中期計画の実施状況は順調であると考えた。次年度以降も、現在それぞれの部門で独自に作成しているウェブサイトのデザインの統一や、より多くのデータベースの公開など、当研究所の広報・研究成果の公開をより効果的に実施するための業務を実施していく。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6232

（様式１）

業務実績書

研№64

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信		
プロジェクト名称	ウェブサイトの充実（(2)－③）		
【事業概要】 研究所の事業・研究成果をはじめ、施設、案内、入札公告など様々な広報を行い、新たな情報発信を発信すべく更なる内容の検討を行った。			
【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中 康成
【スタッフ】 渡勝弥（文化財情報係長）、水野裕史（連携推進課特別研究員）			
【主な成果】 WWW サーバを更新したことにより、新たな情報発信が行えることが可能となった。 奈文研ウェブサイト、飛鳥資料館ウェブサイトともに CMS を導入することにより、ウェブサイトの維持管理が簡易な方法で行えることとなった。			
【年度実績概要】 ・WWW サーバの更新 導入後５年を経過した WWW サーバは、脆弱性もあり、ショッピングカート、問合せフォームなどを利用することができなかったため、他機関のシステムに依存していたが、今後は所内サーバでの構築が可能となった。 ・CMS（Content Management System）の導入 専門知識を必要とせずにウェブサイトの維持管理を可能とすべくシステムの導入を行った。			
【実績値】 （参考値） ウェブサイトアクセス件数：425,044 件			
【備考】			

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6232

自己点検評価調書

研№64

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		

判定理由
適時性：新規 WWW サーバの導入により、脆弱性を解消した。
発展性：新規 WWW サーバを導入したことにより、新たな情報発信が可能となった。
効率性：CMS の導入により、専門知識を必要とせずにウェブサイトの維持更新が可能となった。
継続性：随時更新することによって最新情報の公開を行った。

２．定量的評価

観点						
判定						

判定理由

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	脆弱性の解消、新たな情報発信の可能性の追加、簡便な維持管理方法の確立、最新情報の発信等を適切に行った。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ウェブサイトの維持更新、情報の発信を滞りなく行い得た。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6311

（様式１）

業務実績書

研№65

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	平城宮跡資料館における展示公開（(3)－①）

【事業概要】

平城宮跡に関する理解促進、ならびに当研究所が行う平城宮・京の発掘調査及び研究の成果公開や情報発信のため、平城宮跡資料館において常設展・企画展を実施する。

【担当部課】	企画調整部　展示企画室	【プロジェクト責任者】	企画調整部長　難波洋三

【スタッフ】

加藤真二（展示企画室長）、中川あや（展示企画室研究員）、渡邉淳子（展示企画室特別研究員）、村上加代子（連携推進課課長補佐）

【主な成果】

（１）常設展の円滑な実施のため、その維持・管理に努め、模型の補修、新たな模型の展示など、内容を充実させた。

（２）春期企画展「発掘速報展　平城 2011／文化財レスキュー展」を 24 年 3 月 10 日～5 月 27 日に開催した。

（３）奈良文化財研究所創立 60 周年記念・秋期特別展「地下の正倉院・平城宮第一次大極殿院のすべて」を 24 年 10 月 20 日～12 月 2 日に開催した。

（４）春期企画展「発掘速報展 平城 2012」を 25 年 3 月 16 日～6 月 2 日に開催した。

【年度実績概要】

（１）展示の目玉の一つである第一次大極殿院模型を補修し、新たに高御座の模型を一部期間展示した。常設展のみの開館日：199 日、入館者数 64,318 名。

（２）開催期間：24 年 3 月 10 日～5 月 27 日（49 日間）。

奈良文化財研究所が 2011 年度に平城宮・京で実施した発掘調査の速報展、及び文化財レスキュー事業の展示を行った。発掘速報展は、3 地点の調査成果について床に設置した大きな遺構図面をもとに紹介した。文化財レスキュー展は、レスキュー活動の内容を、写真や動画、派遣者のコメントや新聞記事、実際に作業で使用した服装や道具を交えながら解説した。入館者：42,271 名（うち本年度 34,687 名）。

（３）開催期間：24 年 10 月 20 日～12 月 2 日（39 日間）。

奈良文化財研究所の創立 60 周年を記念し、最も長期間にわたり発掘調査を行ってきた平城宮第一次大極殿院についての展示を行った。奈良時代前半ならびに大極殿の機能を失った奈良時代後半の様子を出土品や模型を通して説明。大極殿の復原建物が完成するまでの復原研究成果や大極殿院発掘調査のあゆみも紹介。リーフレット『地下の正倉院・平城宮第一次大極殿院のすべて』24 年 10 月 20 日刊行した。入館者：20,356 名。

（４）開催期間：25 年 3 月 16 日～6 月 2 日（24 年度は 14 日間）。

奈良文化財研究所が 2012 年度に平城宮・京で実施した発掘調査の速報展を行った。主要 3 地点の調査成果について、 出土品や調査写真をもとに紹介。パンフレット：『発掘速報展 平城 2012』25 年 3 月 16 日刊行した。入館者：5,154 名。

秋期特別展・展示室内ギャラリートーク

【実績値】

平城宮跡資料館　平成 24 年度　入館者数 124,515 名（目標値：85,300 名）、開館日数 301 日。

特別展開催１回、企画展開催２回

（参考値）

（１）常設展のみ 199 日、入館者 64,318 名

（２）4 月 1 日～5 月 27 日（49 日）、入館者 34,687 名、ギャラリートーク 7 回（4 月 6 日、4 月 13 日、4 月 20 日、4 月 27 日、5 月 11 日、5 月 18 日、5 月 25 日、参加者 164 名）

（３）10 月 20 日～12 月 2 日（39 日）、入館者 20,356 名、ギャラリートーク 6 回（10 月 26 日、11 月 2 日、11 月 9 日、11 月 16 日、11 月 22 日、11 月 30 日、参加者 204 名）、リーフレット 1 部（①）

（４）25 年 3 月 16 日～6 月 2 日（平成 24 年度は 14 日）、入館者 5,154 名、ギャラリートーク 2 回（3 月 22 日、3 月 29 日、参加者 46 名）、パンフレット 1 部（②）

【備考】

①『地下の正倉院・平城宮第一次大極殿院のすべて』2012.10.20、7,000 部刊行

②『発掘速報展 平城 2012』2013.3.16、8 頁、10,000 部刊行。

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6311

自己点検評価調書

研№65

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	継続性			
判定	A	A	A			

判定理由
適時性：50 年をかけて発掘調査が行われ、平成 24 年度に学報が刊行された第一次大極殿院を主題とした奈良文化財研究所創立 60 周年にふさわしい展示を実施した。
独創性：通常のケース内展示に加え、映像展示や露出展示など、意欲的にさまざまな展示手法を実践した。
継続性：毎年開催している平城宮・京の最新の発掘調査成果に関する企画展を例年通り実施した。

２．定量的評価

観点	入館者数	開館日数	特別展開催数	企画展開催数		
判定	A	A	A	A		

判定理由
入館者数：年間入館者数 124,515 名で目標値（85,300 名）を達成した。
開館日数：定期休館日、トイレ工事のための臨時休館 8 日間を除けば、毎日開館した。
特別展開催数：目標を達成した。
企画展開催数：目標を達成した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	時宜を得たテーマ設定、展示手法の工夫等により、入館者から高い満足度が得られたことから、A 判定とした。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	一昨年度のリニューアルオープン以降、引き続き定期的に企画展を実施することができた。また展示構成や展示手法については、質が高く、かつ、前年度とは異なる目新しいものを提供することができた。前の中期計画期間にくらべ、さらに向上発展を遂げていることから「順調」と判定した。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6321

（様式１）

業務実績書

研№66

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	飛鳥資料館における展示公開（(3)－②）

【事業概要】

飛鳥資料館第１、第２展示室の常設展示の維持管理を行うとともに、展示の手直しを適宜行う。特別展を春秋の２回開催するとともに企画展、講演会を開催する。

【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	飛鳥資料館学芸室長　加藤真二

【スタッフ】

丹羽崇史、成田聖（以上、飛鳥資料館研究員）

【主な成果】

（１）第１展示室、１階ロビーの内装、照明を全面的に改装した。

（２）春期特別展「比羅夫がゆく―飛鳥時代の武器・武具・いくさ―」を 24 年 4 月 14 日～6 月 3 日に開催し、記念講演会を 24 年 5 月 12 日に行った。

（３）秋期特別展「花開く都城文化」を 24 年 11 月 1 日～12 月 2 日に開催し、記念講演会を 24 年 11 月 17 日に行った。

（４）冬期企画展「飛鳥の考古学 2012」を 25 年 2 月 2 日～3 月 3 日に開催した。

（５）写真コンテスト「遥かなる華の都」（作品展示：24 年 8 月 4 日～9 月 17 日）、「神々の山」（作品展示：25 年 3 月 9 日～4 月 14 日）を開催した。

（６）明日香村活性化事業「光の回廊」（24 年 9 月 15・16 日開催）に参加した。

【年度実績概要】

（１）24 年 6 月 27 日～8 月 31 日に第１展示室を閉鎖し、１階ロビーとともに、内装、照明を全面的に改装した。なお、第１展示室については、引き続き、秋期特別展造作と現状復旧のために、24 年 9 月 1 日～10 月 31 日、24 年 12 月 3 日～25 年 2 月 1 日まで閉鎖した。常設展のみ 169 日、入館者 12,853 名

（２）開催期間：24 年 4 月 14 日～6 月 3 日（51 日間）。内容：飛鳥時代の武器、武具の実物、特徴について、わかりやすく展示するとともに、阿倍比羅夫をとりあげ、その戦いの情況とそれに対峙した北方の蝦夷や唐・新羅の武器・武具について展示を行った。記念講演会：24 年 5 月 12 日開催、講師豊島直博、参加者：103 名。図録『比羅夫がゆく―飛鳥時代の武器・武具・いくさ―』24 年 4 月 13 日刊行。入館者 11,425 名

秋期特別展展示風景

（３）開催期間：24 年 11 月 1 日～12 月 2 日（32 日間）。内容：奈良文化財研究所創立 60 周年を記念して、中国、韓国より文化財 142 件を借用し、日本の展示品とともに、東アジアの都城制、古代東アジアにおける文化交流について展示する予定であったが、諸般の事情から中国からの借用ができず、日本と韓国からの出陳物による主に日韓間に視座を絞った展示を実施した。記念講演会：24 年 11 月 17 日開催、講師井上和人、参加者 42 名。図録『花開く都城文化』24 年 11 月 1 日刊行。入館者 5,743 名

（４）開催期間：25 年 2 月 2 日～3 月 3 日（26 日間）。内容：平成 23 年度に明日香村、高取町、橿原市にまたがる飛鳥地域で実施された主な調査やその出土品の研究を分かりやすく展示し、いち早く公開した。カタログ『飛鳥の考古学 2012』平成 25 年 2 月 2 日刊行。入館者 1,537 名

（５）写真コンテスト　内容：「華のある飛鳥」、「大和三山のある風景」をテーマに写真作品を募集、作品を展示するとともに、優秀作品を選出した。「遥かなる華の都」応募写真 180 点、作品展示期間：24 年 8 月 4 日～9 月 17 日（39 日間）。入館者 5,385 名。「神々の山」応募写真 210 点、作品展示期間：25 年 3 月 9 日～4 月 14 日（24 年度は 20 日間）。入館者数 1,911 名。

（６）光の回廊　開催期間：24 年 9 月 15・16 日、内容：明日香村の活性化事業の夜間照明イベント「光の回廊」に参加し、24 年 9 月 16 日、パフォーマンス集団「ワールドオーダー」の公演を行った。入館者数 1,697 名

【実績値】

飛鳥資料館　平成 24 年度　入館者数 38,854 名（目標値：48,800 名）、開館日数 317 日、特別展開催 2 回、企画展開催 1 回。
講演会開催 2 回、刊行した図録類数 3 冊。

（１）常設展のみ 169 日、入館者 12,853 名　第１展示室閉鎖期間：24 年 6 月 27 日～10 月 31 日、24 年 12 月 3 日～25 年 1 月 31 日

（２）24 年 4 月 14 日～6 月 3 日（51 日）、入館者 11,425 名、講演会 1 回（24 年 5 月 12 日、参加者 103 名）、図録 1 冊（①）

（３）24 年 11 月 1 日～12 月 2 日（32 日）、入館者 5,743 名、講演会 1 回（24 年 11 月 17 日、参加者 42 名）、図録 1 冊（②）

（４）25 年 2 月 2 日～3 月 3 日（26 日）、入館者 1,537 名、カタログ 1 冊（③）

（５）応募写真 180 点、作品展示期間 24 年 8 月 4 日～9 月 17 日（39 日間）、入館者 5,385 名
応募写真 210 点、作品展示期間 25 年 3 月 9 日～4 月 14 日（24 年度は 20 日間）、入館者 1,911 名

（６）24 年 9 月 15・16 日（2 日）、入館者 1,697 名

【備考】

①飛鳥資料館図録第 56 冊『比羅夫がゆく―飛鳥時代の武器・武具・いくさ―』2012.4、51 頁、1,800 部刊行。
②飛鳥資料館図録第 57 冊『花開く都城文化』2012.11、148 頁、1,800 部刊行。
③飛鳥資料館カタログ第 27 冊『飛鳥の考古学 2012』2013.3、22 頁、1,600 部刊行。

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6321

自己点検評価調書

研№66

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	正確性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	

判定理由
適時性：海外のものを含む最新の調査、研究の成果を迅速に展示に生かした。
独創性：奈良文化財研究所付属施設であるからこそできる、古代史、工芸技術史、都城制に関する展示が行えた。
発展性：これまでの調査研究の成果を展示、図録の形でまとめ、今後の調査研究の基礎となる。
正確性：現在知られている資料を網羅的に調査、代表的な事例の実資料を展示した。
継続性：開館以来 36 年間行っていなかった第 1 展示室を中心とした改装に着手、内装面においては今後の活動の基礎を確立した。

２．定量的評価

観点	入館者数	特別展開催数	企画展開催数	講演会数	図録類刊行数	
判定	B	A	A	A	A	

判定理由
入館者数：第 1 展示室の閉鎖、中国から展示品を借用できず、展示できなかったなどの理由により、入館者数は目標値の 79.2%となった。
特別展開催数：目標値（年 2 回）を達成した。
企画展開催数：目標値（年 1 回以上）を達成した。
講演会数：目標値（年 2 回）を達成した。
図録類刊行数：目標値（年 2 冊以上）を達成した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	いずれの観点からも十分な成果をあげることができた。次年度には、改装工事に伴う第 1 展示室閉鎖期間を閑散期の 12 月～2 月とし、入館者数への影響を極力小さくするように取り組む。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第 1 展示室の閉鎖や不測の事態による入館者数目標値の不達成以外は、A評価であったことから、順調に推移していると判断した。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6331

（様式１）

業務実績書

研№67

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	藤原宮跡資料室における展示公開（(3)－③）

【事業概要】

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）庁舎に併設された藤原宮跡資料室及びエントランスにおいて、常設展示、発掘調査成果の速報展示などを実施し、展示公開の充実を図る。

【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査副部長　杉山　洋

【スタッフ】

玉田芳英、清野孝之、降幡順子、石橋茂登、山本崇、黒坂貴裕、今井晃樹、廣瀬覚、庄田慎矢、木村理恵、森川実、若杉智宏、森先一貴、橋本美佳、番光、高橋知奈津、桑田訓也、荒田敬介（以上、都城発掘調査部）、井上直夫、栗山雅夫（以上、企画調整部）

【主な成果】

常設展示及び発掘調査成果の速報展示などを通年で実施し、展示公開の充実を図った。庁舎エントランスの速報展示コーナーでは、最新の調査研究成果の公開を行い、その他適宜展示解説や各地の博物館への文化財貸与を行った。

【年度実績概要】

・都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）庁舎に併設された藤原宮跡資料室において、通年にわたり常設展示を実施した。

・申請のあった団体などへは展示説明、藤原宮跡及び発掘調査現場の案内などの応対を行った。

・庁舎エントランスに設置した発掘調査成果の速報展示コーナーにおいては、「東北日本太平洋沖地震被災文化財レスキュー事業」の展示を昨年度に続き実施した他、また、４月７日～５月６日にかけて「埋もれた大宮びとの横顔―藤原宮東面北門周辺の木簡」と題する特展で「藤原宮木簡」の実物展示を行い、解説パンフレットも発行した。その後「藤原宮東面中門・東面大垣の調査」及び再整理が進んだ「藤原宮東面内濠ＳＤ2300 の土器」の各展示を実施した。

・藤原宮軒瓦の展示及び解説スクリーンの更新を行った。

・４月１日からは、橿原市の解説ボランティアによる土日開館がはじまり、前年比で入室者の増加が認められた。

・各地の博物館等の要請に応じ、当調査部保管遺物ならびに模型・模造品などの貸与を行った。

藤原宮軒瓦の展示及び解説スクリーンの更新

【実績値】

入室者数：9,510 名、開室日数：357 日

刊行物数：1 件①

（参考値）

各種団体などへの展示説明：30 件

他機関への所蔵品貸出：190 件

【備考】

刊行物

①史料研究室「埋もれた大宮びとの横顔―藤原宮東面北門周辺の木簡」2012.3.30

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6331

自己点検評価調書

研№67

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

判定理由
適時性：調査研究成果を常設展示と速報展示により公開することで多様な要望に応えている。
独創性：調査機関ならではの豊富な実物展示に独創性がある。
発展性：速報展示の展示方法と内容に工夫をし、各遺跡の特徴に的を絞った展示を実現している。
継続性：常設展示及び速報展示を通年で公開し、内容を適宜更新している。

２．定量的評価

観点	入室者数	開室日数	刊行物数			
判定	S	A	A			

判定理由

入室者数： 展示の更新や工夫を行い、目標値 4509 人を上回った。
開室日数： 土日開室をし、年間の開室日数が大幅に増加した。
刊行物数：展示の解説資料１件を発行した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	昨年度に引き続き速報展示を随時変更するなどし、調査成果の速報性を維持している。一部、展示内容を更新し、発展性を示した。また、土日開館の実施により、入室者数は昨年度比で明らかに増加し、調査研究成果に公表に大いに貢献した。。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	最新の成果を速報展示というかたちで公開し、入室者の増加も認められたので、順調と判断した。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6411

（様式１）

業務実績書

研№68

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	文化庁平城宮跡管理事務所の運営への協力（(4)－①）

【事業概要】

文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力する。

【担当部課】	研究支援推進部研究支援課	【プロジェクト責任者】	研究支援課長　紅林 孝彰

【スタッフ】

今西 康益（課長補佐）、三本松 俊徳（係員）、飯田 信男（再雇用職員）

【主な成果】

（１）文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等における連携協力、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整及び文化庁施設の維持管理及び修繕等に対して提案、助言、連絡調整等協力し、文化庁の平城宮跡等整備事業に協力した。

（２）関連受託事業：特別史跡平城宮跡及び特別史跡藤原宮跡地における歴史的環境維持・整備事業において平城宮跡の維持管理のために宮跡地内の草刈・植栽業務等を適切に実施した。

【年度実績概要】

（１）文化庁平城宮跡管理事務所の文化庁施設の公開・活用等に対し、以下のとおり積極的に協力した。

○文化庁施設の公開・活用に対して利用申込者との連絡調整

○文化庁が実施する各種行事及び宮跡利用者による各種行事、発掘調査等に係る連絡調整

・関係機関等視察対応（文科省・文化庁・ＡＣＣＵ・イクロム等）

○宮跡内施設（建物、諸設備、工作物等）の整備、維持管理及び修繕等に係る状況把握、実施に伴う文化庁への助言、文化庁と業者との連絡調整及び現場対応確認

・平城宮跡内東院庭園池循環設備及び池清掃等の修理、維持管理等への助言、連絡調整等協力

・復原等施設（大極殿、朱雀門、東院庭園等復原施設、推定宮内省、遺構表示施設、遺構展示館等便益施設、関連工作物、内裏、造酒司井戸、大垣、基壇及び復原水路等復原工作物）の修復及び維持管理等への助言、連絡調整等協力

・第一次大極殿定期点検（免震装置含む）、朱雀門、東院庭園等復原施設点検及び現況調査の実施調整協力

・平城宮跡内便益施設・工作物（苑路、水路等排水設備、柵、橋等安全施設、看板、電気設備、防災防犯設備等）の維持修繕の実施調整協力

・特定外来生物（植物、動物）への対応、蜂の巣駆除等、環境改善及び維持管理等に関する実施調整協力

・平城宮跡施設の計画停電への実施調整協力

・平城宮跡管理及び警備方法の提案協力

○住民等からの要望や苦情の文化庁への取次ぎと対応提案及び周辺自治会への取次と調整協力

・平城宮跡への来訪者、利用者、近隣住民等からの防火、防犯、植生及び運営等の意見

○平城宮跡内の火災等や施設等の不具合確認及び連絡及び提案、助言協力

・火災発生への連絡対応、事故発生への連絡対応、宮跡内安全点検及び環境改善の提案、助言

○県、市、所轄消防署及び所轄警察署等との連絡調整等協力

・平城宮跡安全安心連絡協議会及び平城宮跡みまもり隊活動への支援、参加協力

・火災、盗難等事件捜査及び防火防犯活動への協力

○平城宮跡国営公園整備事業における文化庁への助言協力

・平城宮跡国営公園整備事業への助言協力（平城宮跡地整備既存資料提供、ヒアリング対応等）

・第一次大極殿院復原整備への助言協力（第一次大極殿正殿整備既存資料提供、ヒアリング対応等）

（２）関連受託事業：特別史跡平城宮跡及び特別史跡藤原宮跡地における歴史的環境維持・整備業務

○平城宮跡の維持管理のために宮跡地内の草刈植栽業務等及び宮跡地内における不具合対応策提案

・平城宮跡　草刈り等（芝、雑草、草花類）　　実施時期：24 年 4 月～24 年 12 月

植栽等　（表示、環境樹木類）　　実施時期：25 年 1 月～3 月

その他　側溝等工作物清掃維持、害虫駆除

【実績値】

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6411

自己点検評価調書

研№68

１．定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		

判定理由
適時性：緊急性の高い連絡・修繕相談等へ適時に対応した。
独創性：宮跡内建物、工作物等の整備、維持管理に寄与した。
発展性：専門知識を生かした協力による人的投資の効率性は十分に成果が認められた。
継続性：需要に応じた連携協力体制を十分継続的に行えた。

２．定量的評価

観点						
判定						

判定理由

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・活用等に積極的に協力し、文化庁の要請に応じ、文化庁施設の整備、維持管理及び修繕等に対して適時、的確に対応している。 また、平城宮跡国営公園整備事業に対して文化庁等からの相談に積極的に応じ、適時、的確に対応している。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化庁平城宮跡管理事務所が行う文化庁施設の公開・利用等の連絡、文化庁の各種行事、発掘調査等の連絡調整、文化庁施設の整備、維持管理及び修繕等の状況の把握、相談等に対して適切に対応できている。平城宮跡内における事故、事件、火災、修繕の緊急性の高い事案に対して適時、的確に対応できている。文化庁施設（復原施設・便益施設等）の計画的整備に対して現況に基づいた維持管理の提案、助言協力等が適切に行われている。また、現在進行中の平城宮跡国営公園整備事業を推進する文化庁や国土交通省に対して資料提供等の協力が適切に対応できており、引き続き中期計画に基づいた実施に努めたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6412

（様式１）

業務実績書

研№69

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	文化庁・国土交通省が行う平城宮跡の復原・整備への協力（(4)－①）

【事業概要】

第一次大極殿院地区を中心とする平城宮跡の整備・公開・活用に関する調査研究のため、国土交通省の行う復原整備計画に沿った実践的調査研究を実施する。さらに『特別史跡平城宮跡保存整備基本計画推進計画』に基づく具体的な整備内容に対して、専門的・技術的な援助・助言を行うため、復元・整備に関する資料の整理や検討、新たに行うべき調査研究の計画案などを提示する。また、国土交通省や文化庁の主催する会議等に参画し、専門的・技術的な援助・助言を行う。

【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長　深澤芳樹

【スタッフ】

小野健吉（文化遺産部）、小池伸彦・芝 康次郎・諫早直人・神野 恵・青木 敬・小田裕樹・渡辺丈彦・石田由紀子・川畑 純・渡辺晃宏・馬場 基・山本祥隆・箱崎和久・鈴木智大・海野 聡・松下迪生・井上麻香・中島咲紀（以上、都城発掘調査部）、田中康成・今西康益（以上、研究支援推進部）

【主な成果】

（１）第一次大極殿院復原検討会を 17 回開催し、そのための資料収集と整理、検討会記録集を作成した。
（２）平城宮跡の整備設計・工事等に対して、設計条件の整理、立会調査等を実施した。
（３）文化庁や国土交通省が開催する会議等に対して、専門的・技術的な援助・助言を行った。

【年度実績概要】

（１）第一次大極殿院復原検討会を計 17 回開催した。
・上記の検討会を開催するにあたり、発掘遺構や現存建築などの資料収集と整理を行った。
・第一次大極殿院復原検討会の検討会記録作成に向けて、活字化した発表録音の校正を行うとともに、印刷原稿の作成などを行った。

（２）平城宮跡の整備設計にあたり、過去の整備の設計図書の他、発掘遺構の標高など、設計条件の整理を行って、適宜情報を提供した。
・平城宮跡内の整備工事にあたり、立会調査を行って記録を作成した。

（３）国土交通省や文化庁が開催する以下の会議等に出席し、専門的・技術的な援助・助言を行った。
・国土交通省が開催する「平城宮跡第一次大極殿院建造物復原整備検討委員会」
　第一次大極殿院復原検討会の検討内容を発表して助言を得た。
・文化庁が開催する「平城宮跡保存・活用連絡協議会」
　奈良県・奈良市・国土交通省・文化庁の担当職員等と平城宮跡の保存と活用について協議した。
・国土交通省が作成する「国営平城宮跡歴史公園景観整備方針」への専門的・技術的な援助・助言。
　景観整備方針の作成にあたり、これまでの平城宮跡の保存・活用の観点から助言を行った。

【実績値】

（１）第一次大極殿院復原検討会開催数；17 回
（１）上記検討会の記録集『第一次大極殿院復原検討会記録５』『同６』をまとめた。
(参考値)
（２）平城宮跡内の整備工事にともなう立会調査出動件数；15 件 90 日以上。
（３）文化庁や国土交通省が開催する会議等への参加；7 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6412

自己点検評価調書

研№69

１．定性的評価

観点	適時性	継続性	正確性	独創性	発展性	
判定	A	A	A	A	A	

判定理由
適時性：復原検討会では必要な検討を適時に行い、年度内の検討成果を検討か記録にまとめることができた。
文化庁や国土交通省の各種要請に対し、的確に対応することができた。
継続性：復原検討会を継続的に開催することができた。
正確性：復原検討会における検討の内容は、精緻な分析に基づいて行うことができた。
文化庁や国土交通省の各種要請に対しても、正確に対応することができた。
独創性：復原検討会では精緻な分析に基づきつつ、他例のない遺構に対して新たな案を考え検討することができた。
発展性：復原検討会で行った検討手法は、全国の遺跡整備にも応用できる。
今後の平城宮跡の整備・活用に向けて、次のステップに進むための着実な成果をあげることができた。

２．定量的評価

観点	検討会開催数	記録数				
判定	A	A				

判定理由
検討会開催数：平均して月に一回以上の検討会を開催することができた。
記録数：当初計画した検討会記録集２冊を刊行することができた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	復原検討会については、短期間に多視点からの濃密な研究・検討を重ねており、次年度以降も同様に進めていきたい。平城宮跡の整備工事に対する対応も的確に行っており、遺跡の保護も十分に行うことができた。また、文化庁や国土交通省からの各種要請すべてに対応することができた。次年度もさらに連携を深めながら、平城宮跡の保護と整備・活用に向けて取り組んでいきたい。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	第一次大極殿院の復原研究は、これまでの朱雀門や第一次大極殿、東院庭園などの復原検討と比較しても、すでにそれらをしのぐ調査研究を重ねており、順調に検討が行われている。次年度は具体的な細部についての復原検討を行っていきたい。文化庁や国土交通省からの各種要請、平城宮跡の整備工事に伴う立会調査に対しても、これまで同様、的確に対応していきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6413

（様式１）

業務実績書

研№70

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設への協力（(4)－①）

【事業概要】

国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内の体験学習館の建設とその展示に対して、助言・協力を行う。

【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	加藤真二（飛鳥資料館学芸室長）

【スタッフ】

丹羽崇史、成田聖(以上、飛鳥資料館研究員)

【主な成果】

（１）国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所、体験学習館展示担当業者と調整会議を行った。

（２）国営飛鳥歴史公園事務所の依頼にもとづき、キトラ古墳体験学習館の展示に資する奈文研所蔵資料一覧を作成、提示した。

（３）断続的に担当者間で調整・協議を行った。

【年度実績概要】

（１）国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園に建設される体験学習館の展示の実施設計に助言、協力するのにあたり、国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所、体験学習館展示担当業者などとの調整会議を 24 年 11 月 15・22 日・25 年 2 月 1 日の 3 回開催した。

（２）国営飛鳥歴史公園事務所の依頼にもとづき、キトラ古墳体験学習館の展示に資する、当研究所が所蔵する図書、出土品、映像等の資料の一覧、展示の実施設計に向けた調査表への回答を作成し、公園事務所に提示した。

（３）調整会議、資料一覧にもとづき、展示に関して、断続的に担当者間で調整・協議を行った。

【実績値】

資料数：キトラ古墳体験学習館の展示に資する奈文研所蔵資料一覧　1 点、同館の展示実施設計に向けた調査表回答 1 点を作成した。

（参考値）

会議・ヒアリング 3 回（24 年 11 月 15 日於飛鳥資料館、24 年 11 月 22 日、25 年 2 月 1 日於奈文研都城調査部飛鳥・藤原地区）。その他、断続的に担当者間での協議

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6413

自己点検評価調書

研№70

１．定性的評価

観点	適時性	効率性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		

判定理由
適時性：体験学習館展示の実施設計に必須な作業であり、当研究所による発掘調査、展示公開を公園事務所と協力して社会に還元できた。
効率性：短期間に集中して行うことができた。
継続性：今後の体験学習館展示の実施設計にあたり、その基礎固めをすることができた。
正確性：調査研究の成果を反映させることができた。

２．定量的評価

観点	資料数					
判定	A					

判定理由
資料数：国営飛鳥歴史公園事務所の要求に十二分に応える詳細な資料を作成、提供した。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国営歴史公園事務所の要請に十分に対応するとともに、当研究所の調査研究、展示の成果を余すことなく、正確に提供し、それらの社会的還元を果たすことができた。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画どおり達成している。次年度以降も積極的に協力していきたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6414

（様式１）

業務実績書

研№71

中期計画の項目	６　情報発信機能の強化
プロジェクト名称	国土交通省が行う平城宮跡展示館（仮称）の建設への協力（(4)－①）

【事業概要】

国土交通省が行う平城宮跡展示館（仮称）の建設にあたり、主に学芸に関わる部分において、専門的な見地から協力を行う。

【担当部課】	企画調整部　展示企画室	【プロジェクト責任者】	企画調整部長　難波洋三

【スタッフ】

加藤真二（展示企画室長）、中川あや（展示企画室研究員）、渡邉淳子（展示企画室研究員）

【主な成果】

（１）実施設計に向けて必要な業務の整理をした。
（２）実施設計までの業務スケジュールを立案した。
（３）設計業者からの業務受託を受け作業を実施した。

【年度実績概要】

（１）昨年度末に策定された基本設計を基に、平成 26 年度から始まる実施設計までの間に、詳覧ゾーンの造作にあたって必要な業務の洗い出し、整理を行った。

（２）詳覧ゾーン造作にかかわる業務の遂行スケジュールを立案し、国交省と設計業者に提出した。

（３）（２）を踏まえて、本年度に必要な業務として設計業者から委託された、詳覧ゾーンに展示可能な出土品一覧の整理を行った。

・　設計業者が国土交通省から委託された「映像展示コンテンツ基礎調査」業務について、平城宮内の復原建物の見処をまとめた「感動ポイントカード」の作成に協力した。

【実績値】

資料２点（遂行スケジュール１点、展示可能出土品一覧１点）

（参考値）

国土交通省地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所平城分室との打合せ　７回

（※うち、全体会議５回、展示に関する設計業者との分科会　２回）

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6414

自己点検評価調書

研№71

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性			
判定	A	A	A			

判定理由

適時性：平成 26 年から始まる実施設計に備えた業務として必要である。
発展性：これまでに行った協議ならびに作成し、国土交通省に提出した資料は、国交省の今後の事業の進展に大いに寄与するものである。
効率性：専属の派遣職員を１名雇用し、展示可能な出土品一覧整理を短期間で集中的に行った。

２．定量的評価

観点	資料数					
判定	A					

判定理由
資料数：国土交通省側からもとめられた資料を作成、提示できた。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年から実施設計開始までの 2 年間に遂行すべき作業の重要性を国交省と設計業者に主張し続け、業務受託が実現した

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	国土交通省の求めに応じた、協議ならびに資料作成を行ったことから、順調と判定した。ただし、業務受託が実現したのが平成 24 年度末の 2 か月であったため、遂行できた業務量が限定的であった。次年度は、国交省・設計業者とより密に連携を取り合い、当研究所の意図を速やかに反映してもらえるような努力が必要である。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6421

（様式１）

業務実績書

研№72

中期計画の項目	６ 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティア事業の実施（(4)－②）

【事業概要】

平城宮跡への来訪者に奈良文化財研究所の調査研究の成果を発信するとともに、平城宮跡の歴史や文化財に対する理解を深めてもらうため、 平城宮跡資料館や遺構展示館、東院庭園、朱雀門、第一次大極殿の復原建物等の案内・解説を行う平城宮跡解説ボランティアの運営を実施する。

【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中康成

【スタッフ】

中川あや（企画調整部研究員）、渡邉淳子（企画調整部特別研究員）、村上加代子（課長補佐）

【主な成果】

高い知識に基づく解説をより多くの来訪者に効率よく行い、文化財への理解を大いに広げることができた。

【年度実績概要】

・定点解説の他、予約及び当日受付した来場者を対象に「ツアーガイド」として宮跡内散策に同行し解説を行った。
・活動者に対しては、奈良文化財研究所が主催する専門研修及び他機関のボランティアガイドが文化財関係を解説する場に赴き臨地研修を実施した。
・活動拠点でもある平城宮跡資料館が企画する展示ごとに、展示趣旨の解説をその都度研究所研究員により実施した。

ツアーガイド風景

【実績値】

・解説ボランティア登録数：155 名

（参考値）

・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：101,665 人
・解説活動日数　309 日
・解説活動数延べ　3,911 人（1 日あたり 13 人）
・ボランティアに対する学習会等回数

平城宮跡資料館秋期企画展示研修	3 回
〃　　春期企画展示研修	1 回
講演形式専門研修	1 回
臨地ガイド研修	1 回
所内見学会	1 回

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6421

自己点検評価調書

研№72

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	

判定理由
適時性：来訪者の様々な知識需要・必要性に対し、その場にて十分な対応ができた。
発展性：多種多様な層の来訪者へ解説ができ、その反響は大きかった。
効率性：解説に係る時間的・人的投資は効率よくできた。
継続性：年間を通して、とぎれず継続した解説者の配置を行うことができた。
正確性：研修で得た知識・経験を基に正確な情報を伝えることができた。

２．定量的評価

観点	解説ボランティア登録数					
判定	A					

判定理由
解説ボランティア登録数：ガイドに必要な人数を十分に満たしている。

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定点解説、ツアーガイド数とも順調に伸びを維持しており、ボランティアによる解説を通じて文化財の理解を広めることに大きく貢献した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	解説するボランティアへの学習・研修機会を提供し、そのレベル向上につなげ、広報による解説受講者数の増加を図ることなど、積極的なボランティア運営を実施した。今後もこのペースを維持し、奈良文化財研究所の情報発信、さらには平城宮跡の公開活用につながるよう力を注ぎたい。

【書式Ｂ】
（様式１）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6431

業務実績書

研№73

中期計画の項目	６　情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	平城宮跡防災・防犯パトロール「平城宮跡みまもり隊」への参加((4)－③)

【事業概要】
平城宮跡内でのマナー向上や防災・防犯に関して、平城宮跡みまもり隊へ参加することにより、平城宮跡内でのマナー向上や防災・防犯に寄与する。

【担当部課】	研究支援推進部研究支援課	【プロジェクト責任者】	研究支援課長　紅林 孝彰

【スタッフ】
今西 康益（課長補佐）、三本松 俊徳（係員）

【主な成果】
平城宮跡来訪者に、平城宮跡内でのマナーの向上や防災・防犯活動を行っていることを理解してもらうことができた。

【年度実績概要】
平日は、みまもり隊の帽子を着用の上、平城宮跡内を巡回し、火災や宮跡内にある看板等の毀損予防のパトロール活動を行った。月 1 回の土日のボランティア活動では、平城宮跡来訪者に防犯メッセージが書かれたティッシュペーパーの配布や注意喚起の声かけを行い、マナー向上や防災・防犯意識を高める活動を行う等、事務局として連絡調整を行った。
広報活動として、「奈良しみんだより」にボランティア活動日を掲載し広く一般市民の参加を促した。平城宮跡周辺道路でドライバーのタバコのポイ捨て予防策として、平城宮跡でのタバコのポイ捨て禁止やその他禁止行為をのせたチラシを所轄警察署に置いてもらい、広く市民に平城宮跡内での禁止行為の周知を行った。
年２回、文化庁平城宮跡管理事務所、国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所平城分室、奈良県、奈良市、所轄警察署及び所轄消防署の行政機関や NPO 法人平城宮跡サポートネットワークによる連絡会議を開催しパトロール活動の報告を行った。

【実績値】

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6431

自己点検評価調書

研№73

１．定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			

判定理由
適時性：市民ボランティアと共に活動を行った。
発展性：参加者はみまもり隊員に加え一般市民も加わることがあった。
継続性：計画に従って活動を行い、連続的な社会還元ができた。

２．定量的評価

観点						
判定						

判定理由

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮跡内の問題事項等について、文化庁平城宮跡管理事務所、国土交通省国営飛鳥歴史公園事務所平城分室、奈良県、奈良市、所轄警察署及び所轄消防署の行政機関やNPO法人平城宮跡サポートネットワークと協力して問題解決に尽力した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平城宮跡のパトロールを行い宮跡内の来訪者の安全・安心に寄与した。 今後も宮跡のパトロールを行い宮跡内の問題事項等の検証を行い、それを行政機関やNPO法人平城宮跡サポートネットワークにフィードバックして来訪者の安全・安心に努めたい。

【書式Ｂ】　　施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6441

（様式１）

業務実績書

研№74

中期計画の項目	６ 情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信
プロジェクト名称	ＮＰＯ法人等への支援（(4)－④）

【事業概要】

平城宮跡で活動しようとする各種ボランティア、また文化財関係のボランティアに対して要請があれば、奈良文化財研究所施設を活動の場所として提供することや、文化財に関する学習会等への講師の派遣を行う等の支援を行い、ボランティア団体の育成に寄与する。

【担当部課】	研究支援推進部連携推進課	【プロジェクト責任者】	連携推進課長　田中康成

【スタッフ】

村上加代子（課長補佐）

【主な成果】

ボランティア団体への支援を通じて、その育成を図るとともに、文化財に対する啓発活動を行った。

【年度実績概要】

・「特定非営利活動法人平城宮跡サポートネットワーク」に対して、活動場所、講師の派遣など積極的な活動支援を行った。

・特に今期は、共催で「子ども歴史教室」を実施するとともに、「平城宮跡探検隊」、「遺跡見学会」を後援し、年間を通して連続した支援ができた。

子ども歴史教室〈木簡作り〉

平城宮跡探検隊

【実績値】

（参考値）

奈良文化財研究所が支援しボランティアが実施した主な事業名称、回数、活動場所、従事ボランティア数、参加者数

子ども歴史教室　　３回開催、平城宮跡資料館講堂他、ボランティア延べ 30 名、参加者数 49 名

平城宮跡探検隊　　１回開催、平城宮跡内、ボランティア延べ 13 名、参加者数 70 名

平城宮跡歴史文化講座（遺跡見学会）　２回開催、ボランティア延べ８名、参加者数 35 名（講師派遣）

平城宮跡歴史文化講座（講演会）　３回開催、平城宮跡資料館講堂、ボランティア延べ 45 名、参加者数 447 名

万葉集勉強会　　12 回開催、平城宮跡資料館小講堂、ボランティア延べ 60 名、参加者数延べ 245 名

【備考】

【書式Ｂ】
（様式２）

施設名 奈良文化財研究所　　処理番号 6441

自己点検評価調書

研№74

１．定性的評価

観点	継続性	発展性	効率性			
判定	A	A	A			

判定理由
継続性：支援事業は、継続的に実施された。
効率性：奈良文化財研究所の施設を有効かつ効果的に使用し、参加者への広報・成果発表につながった。
発展性：子供達等の将来につながる好影響のある体験学習が実施された。

２．定量的評価

観点						
判定						

判定理由

３．総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	子ども歴史教室，平城宮跡探検隊、平城宮跡歴史文化講座等への講師派遣、活動場所提供等の支援を行い、活動の活性化に貢献した。

４．中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	ボランティア団体の活動要請に対し、積極的に支援し、各事業が行われた。 今後も各種ボランティ育成に寄与していきたい。